

## 学 位 論 文 審 査 の 要 旨

論文提出者	中村 文彦
論文審査委員	(主 査) 朝日大学歯学部 教授 北井 則行 (副 査) 朝日大学歯学部 教授 碓 哲崇 (副 査) 朝日大学歯学部 教授 堀田 正人 (外部審査) 東北大学大学院文学研究科 教授 坂井 信之
論文題目 <p style="text-align: center;">歯科医学知識と心理特性が歯列不正の認知に及ぼす影響</p>	
<p><u>論文審査の要旨</u></p> <p>本論文は(1)歯科医学知識を有する者と有しない者との間で、矯正歯科治療を必要と感じるオーバージェット値に違いがあるかどうか、(2)同一人が、歯科医学教育を受講した前後で、矯正歯科治療を必要と感じるオーバージェット値が変化するかどうか、(3)歯科医学知識を有しない者が矯正歯科治療を必要と感じるオーバージェット値はどの程度か、(4)被験者の心理特性が矯正歯科治療を必要と感じるオーバージェット値に影響を及ぼすかどうか、を明らかにすることを目的としたものである。</p> <p>某歯科衛生士専門学校入学直後の1年生(96名)、歯科医学教育受講後の3年生(32名)を被験者とし、1年生を歯科医学知識のない群、3年生を歯科医学知識のある群と定義した。歯科医学知識のない群については、同一人が歯科医学教育を受講した2年後の3年生時(82名)に追跡調査を行った。正常咬合排列を行った歯列模型について、回転中心を歯根長の2分の1として傾斜移動させ、オーバージェットを7.0mm, 6.0mm, 5.0mm, 4.0mm, 3.0mm, 2.5mm, 2.0mm, 1.0mm, 0.0mm, -1.0mm, -2.0mmに変化させた11種類の模型を作製し使用した。閲覧方法には模型を無作為に閲覧させる方法(無作為閲覧)とオーバージェット値の降順に並べて閲覧させる方法(順番固定閲覧)の2つの方法を用いた。それぞれの閲覧方法で、模型を他人と仮定した場合(他人仮定)と自分と仮定した場合(自分仮定)で矯正歯科治療を必要と感じるかどうかを尋ねた。データ集計方法として、矯正歯科治療を必要と感じると回答した被験者の数を模型ごとに調べた。また、矯正歯科治療を必要と感じる模型の数(歯列不正認知模型数)を被験者ごとに調べた。被験者に対して心理学的性格検査として、矢田部・ギルフォード(YG)性格検査を行った。</p> <p>歯科医学知識のある群とない群の間で矯正歯科治療を必要と感じる被験者の比率に違いがあるかどうかを、模型ごとにFisherの正確確率検定を用いて分析した。歯科医学教育受講前後で矯正歯科治療を必要と感じる被験者の比率に違いがあるかどうかを、模型ごとにMcNemar検定を用いて分析した。YG性格検査結果と歯列不正認知模型数との関連性を明らかにするため、Pearsonの相関係数を用いて分析した。有意水準P値は0.05未満とした。</p> <p>歯科医学知識の有無による矯正歯科治療を必要と感じるオーバージェット値の違いについては、無作為閲覧・他人仮定時、無作為閲覧・自分仮定時、順番固定閲覧・他人仮定時において、オーバージェット0.0mmについて、歯科医学知識のない者よりもある者の方が矯正歯科治療を必要と考える比率が有意に高かった。</p>	

追跡調査の結果では、オーバージェット 0.0mm について、無作為閲覧・他人仮定時、無作為閲覧・自分仮定時、順番固定閲覧・自分仮定時において、歯科医学教育受講後の方が矯正歯科治療を必要と考える比率が有意に高かった。

矯正歯科治療を必要と感じる者の比率が 20%以下となるオーバージェット値の範囲については無作為閲覧時では他人仮定時でも自分仮定時でも 1.0~3.0mm であり、順番固定閲覧時では他人仮定時でも自分仮定時でも 2.0~3.0mm であった。

歯列不正認知模型数と YG 検査の各性格特性得点との関連性については、模型を自分と仮定した場合、1年生群では、無作為閲覧時に、歯列不正認知模型数と「支配性」および「社会的外向性」との間で有意な正の相関が認められた。3年生群では、無作為閲覧時と順番固定閲覧時に、歯列不正認知模型数と「活動性」との間で有意な負の相関が認められた。

以上の結果から矯正歯科治療を必要と考えるオーバージェット値は、歯科医学知識と心理特性の影響を受けていることを明らかにしている。

本論文は、矯正歯科治療を必要と考えるオーバージェット値は、歯科医学知識と心理特性の影響を受けているか、横断および縦断調査を行い明らかにしたもので、歯科矯正学分野における診断学および治療学の発展に貢献できると考えられる。よって審査委員は本論文を博士（歯学）の学位を授与するに値すると判定した。